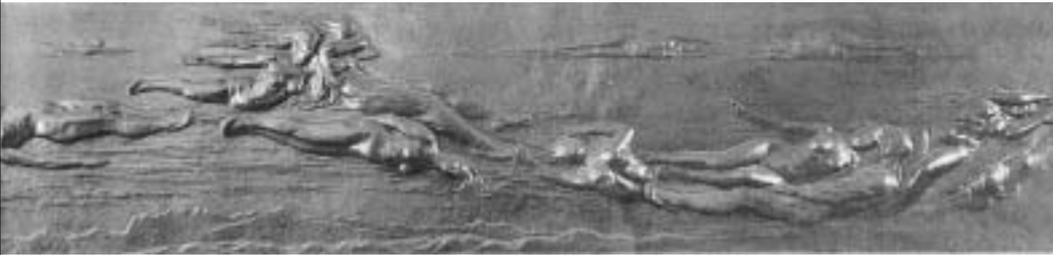


KURENAI : Kyoto University Research Information Repository

Title	静脩 Vol. 46 No. 1 (2009.6) [全文]
Author(s)	
Citation	静脩, 46(1)
Issue Date	2009-06-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/84805
Rights	
Type	Article
Textversion	publisher



<特集：図書館への期待1>

「学生がのぞむ図書館」とは

- 西村周三 教育・学生・国際(学生)担当理事・副学長に聞く -

インタビューのテーマは、「図書館への期待」。昨年度行った図書館利用者アンケート調査の集計結果をもとに、西村周三理事が日頃、学生のために図書館はこうあってほしい、と感じておられることを、種々の角度から熱く語っていただきました。



「24時間学習スペースを高く評価する」

これを始めていただけてすごく良かったという印象があります。最近のトピックであるということもありますが、全国にさきがけてやっていただいたこともあり、本学が誇れるサービスだと思います。アンケートにも、24時間学習室ができたのは、嬉しい、期待している、という回答がありましたが、学生からの評判を聞いていても一番聞こえてくる反応ですね。今までは図書館といえばどちらかというとサービスが良くない印象がありましたが、これでだいぶ学生全体の印象が変わったと感じています。

「学生からの一番の要望は開館時間の延長」

図書館本体も、もっと時間延長をお願いした

と思います。学生からの一番の要望は開館時間の延長です。アンケートの自由記述で一番期待・要望が大きいことをみても、図書館の一番大きなテーマは開館時間の延長だと思います。



「学生の勉強パターンと開館時間」

国際的な観点からも、欧米の図書館の開館パターンに学ぶべきところがあるのではないのでしょうか。欧米では利用者の勉強のパターンに合わせて、曜日によって開館時間に柔軟性を持たせています。教員の立場からも、授業が始まる少し前に図書館が開いていると助かりますね。特に月曜日の朝はそう思うことが多いです。

「遠隔地のニーズ：宇治キャンパスミーティングから」

先日、総長と一緒に宇治キャンパスに行って、若手研究者、学生代表者それぞれ20人くらいと

話をしました。参加者からは吉田地区がうらやましい、24時間学習室を宇治にもつくってほしい、との声があがりました。また全体的には、宇治は自然系がほとんどなので、オンラインサービスへのニーズがすごく高いこともわかりました。吉田地区の施設利用や現物へのアクセスには、距離的なあきらめもあるようでしたが、逆にインターネットを通じた検索などのサービスの充実が望まれています。桂にはまだ行っていませんが、おそらく同様の要望が出ると予想しています。これから桂にはますます学生が増えますし、宇治にも多くの学生が所属しています。遠隔地の学生へのサポートに今後より配慮していただくことが必要になるかと思えます。

「司書サービスをもっと充実してほしい」

また、欧米の図書館とくらべていわゆる司書サービスが足りないと感じています。その点、もっと充実してほしいですね。自分の経験ですが、欧米の図書館で探し物をしていたら、司書の人から声をかけられ、探索のための的確なアドバイス、情報を提供してもらい非常に感銘を受けたことがありました。京大の図書館員もそうあ



ってほしいと期待しています。

「遠隔地ではサービスに対する渴望感がある」

宇治の学生と話をしていると、サービスに対する渴望感があるようにみえました。それを補うにはどういう工夫があるのか。私は、テレビ電話、スカイプを使うようなことをイメージしましたが、webでできるレファレンスでもよいですね。また、広報の問題も考えねばなりません。せっかく出張講習会を企画しても広報が足りなければ講習会があること自体を知らない(=サービスがない)ことになります。閉室日や講習会など、重要なお知らせはなるべく目に付くところに置いて学生に確実に伝わるよう、図書館ホームページの作り込み方、工夫が必要だと思います。

「利用しない人をどうやって呼び込むか」

全学で24,000人の学生のうち18,000人が図書館を利用していますが、図書館として一番大きな課題は、利用したことがない、ほとんど利用しない人をどうやって呼び込むかにあると思います。これについては別の意味からも発想の転換が必要ですね。私が今教育担当として一番力を入れているのは、教養教育の充実です。自分の専門以外は知らない「たこつぼ教育」の改善に取り組んでいます。分野横断的教育をやるといのが全国での大きな流れになっていまして、図書館にもこういった教育改善の動きを応援していただく体制をお願いしたいと考えています。

「当面必要な本は100冊を超えない」

宇治でドクター学生に聞いたら、他の分野の本を借りたくても研究室にしかないので借りられないという話が多く出ました。専門分野の先生がその専門分野の学生のために収集した資料がそれ以外の分野の学生には容易にアクセスできないという問題は、京都大学では容易に解決できない長年の懸案事項となっています。アメ

リカなどの場合、本は全部図書館が持つことになっています。本当は図書館に全部預けたらいいと思います。当面必要な本は、絶対に100冊を超えないと思います。

「学部横断的教育と教養書」

大学院重点化の施策のもと、平成4年に教養部を改組して16年が経過しました。専門教育重視から教養教育重視へと、今、発想の逆転が起こっています。対応していくには難しい面も多いのですが、10年ほど前から、専門外の人にわかりやすく専門を教える本がたくさん出版されています。そういう意味では媒体としての図書はすごく役に立っていますので、学際的な教養書を附属図書館でもっと整備していただきたいですね。

「僕は複本派」

図書館の選書のしくみがどうなっているのかわからないのですが、図書館の全体的な印象からいうともっと複本を増やして欲しいと思います。大学では皆が同じ知識を共有していることが大事なことです。図書館のやり方としては、誰も読まないような本を置くのではなく、人気がある本や、教科書であれば、質の良い教科書を多く置くほうがよいと思います。欧米では教科書は1科目に30冊くらいあり、それぞれ複本がたくさん図書館にあります。

「選書は教員の協力を得て」

図書館に置く本は、是非先生方に選書能力を発揮してもらいたいですね。先生方には、研究だけでなく教育のことにもっと力を入れてほしいと思います。学生に読ませたい本、専門分野の人が読む本、専門外の人がその専門分野について知るために読む本、周辺分野を理解するために読む本、全然関係ない人が読む本、というように選定してもらうのがよいと思います。ただ、教員には何度もお願いしないといけないという

のが教育担当理事になっていちばん感じます。3回4回、うるさく言うのが現在の生活信念になっています(笑)。図書館も、先生方に興味を持ってもらうためには何度も繰り返さないといけませんよ。

「留学生には複本が必須」

留学生にとって一番深刻なのが、大事な本がすでに誰かに借りられて利用できないことです。留学生の場合、複本が特に重要。留学生にとって読みやすい本、まず英語、できれば中国語、ハンゲルのもも揃えるとよいと思います。留学生には複本をおくことが資料整備のポイントになります。日本人の学生はお金があっても本を買いませんが、留学生の場合、経済的余裕がなくて本を買えない学生がいます。選定は、留学生担当教員や、国際交流センターの先生方に協力をお願いすればアドバイスや選書をしていただければと思います。留学生の本に対する意向は、日本人学生とはかなり違います。まずはシラバスに載っている本を揃えることが重要ではないでしょうか。

「蔵書は京大の国際化に対応した整備を」

国際化にともない京都大学でも、近々、英語のみで卒業できるコースがたくさんできる予定です。留学生が相当数増えることになるため、図書館でもそれに応じた英語の本を整備する必要がでてくるでしょう。また、場合によっては留学生用のスペースを作れば良いかもしれませんが、国際化の流れのなかでどういうふうにするか、これからの課題です。

アンケート調査結果は、次号で報告の予定です。

新しくなった附属図書館を紹介します

附属図書館の改修計画は、平成20年度の「京都大学重点事業アクションプラン」として採択され、学習・教育支援サービス機能の充実・強化を図ることを主要な目的とし、自学自習環境、閲覧環境、長時間利用環境の整備を終え、この4月に全面開館しました。

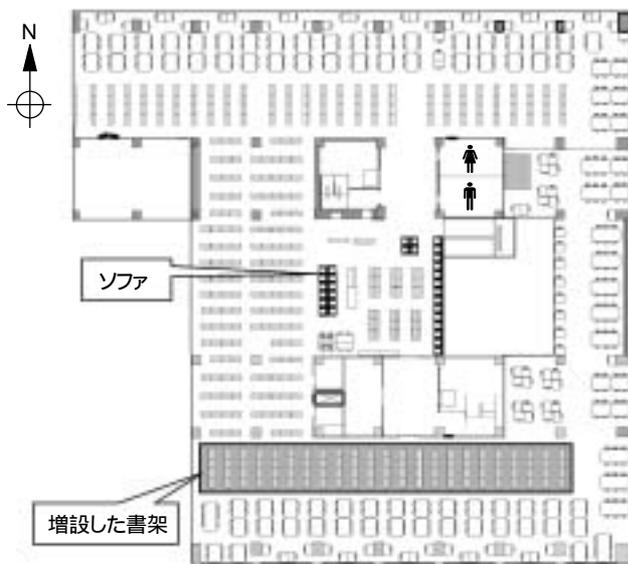
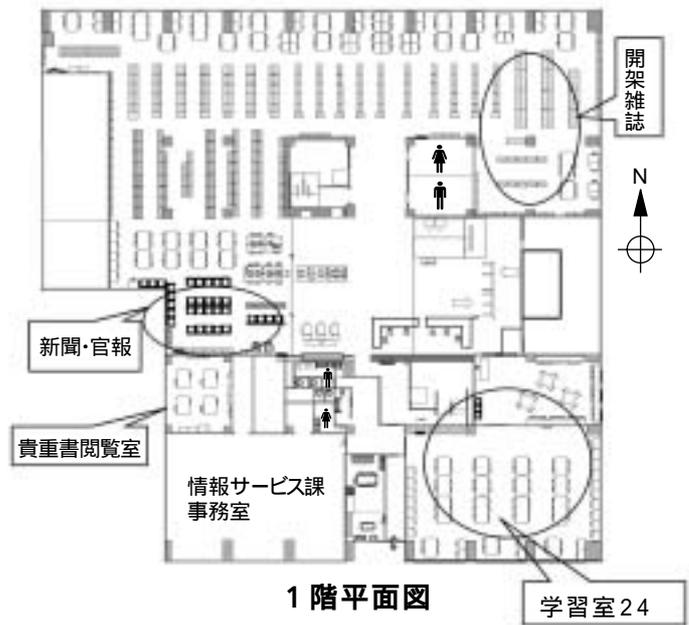
改修の概要については、すでに『静脩』(Vol.45.No.1 2008年6月)で「附属図書館リニューアル」
として、また2009年1月にオープンした「学習室24」については、『静脩』(Vol.45.No.3 2009年1月)でお知らせしておりますので、今回は、新しくなった附属図書館を図表でご紹介いたします。

1階：

「学習室24」は、全面開館に先立って1月からオープンしておりますが、平日は深夜まで利用者が多く、この4月からの利用者数は1日あたり800～900人に及んでいます。

運用にあたっては、安全・安心の観点から、入・退室の際の認証、夜間時での警備員の常駐、防犯カメラの設置を行っております。

「学習室24」の設置に伴い、開架雑誌、新聞・官報等の配置が1階平面図のとおり変更となっております。また、これらに隣接して置かれていたソファ(62脚)は、すべてリニューアルされ、1階の新聞・官報、2階のドリンクコーナーへそれぞれ配置しましたので、お疲れの際などにおくつろぎください。



「学習室24」の利用状況

2階：

図書を使いやすくするという目的で、約3万冊を収容できる書架を増設しました。これにより増加する新刊書に対応するとともに、利用頻度の高い書庫内図書を移動し、開架図書の充実を図りました。

3階：

これまで事務スペースとして使用していた区域をすべて利用者スペースとすることにより、一般閲覧座席数、情報端末数、共同研究室、研究個室を増加・増設し、利用者の多様な学習要求に応える学習環境を整備しました。

3階は間仕切り壁を出来るだけ取り除き利用者の動線を単純にしました。拡張された利用者スペースには安全のために防犯カメラを設置し、これまで安全上の観点から利用時間を制限していた共同研究室及び研究個室の利用を閉館1時間前まで、さらに土日祝も利用出来るよう拡充しました。

3階で増設された施設等

一般閲覧席	286席
情報端末座席数(端末台数)	128席(106台)
研究個室	14席
共同研究室	5室(合計40席)
講習会室	1室(定員30名)

最終的に附属図書館の座席数は 915席から 1,281席となりました。

その他：

快適な学習環境及び職場環境の維持のために、地上階は四半世紀ぶりに空調設備を省エネルギー・高効率な設備に更新し、必要に応じ階別にまたは室別に利用できるようになりました。地下書庫の空調設備については、特に一定以下の湿度に保てるよう2系統の専用設備を設け資料の保存環境を維持しています。

また、今回の改修とは別に平成18年度から

**3階平面図**

情報端末エリア

3カ年計画で進められてきた電動集密書架(地下2階、収蔵規模：約75万冊)の機能更新が平成20年3月で終了し、利用上の安全がより一層向上しました。更新された機能の一つとして、ブロック毎に通路散開機能があります。この機能は、棚ユニット間に空間をつくり、棚内への通風を確保し空調効果を高め保存環境を保つのに有効に働きます。

(情報サービス課)

<一冊の本シリーズ 13>

青春を駆け抜けるとは

情報学研究科准教授 稲垣 耕作

青春とは何？ 若い時代、特に鮮烈な印象を受けた出来事があった。青春はごく個人的なもののはずだが、理想の青春、その普遍を見る思いがした。大学紛争の喧騒がまだ残っていた時期だった。

1971年11月15日号のElectronics News誌、年商わずか500万ドルのアメリカ企業インテルの広告が掲載された。そのころの私に最も影響を与えたニュース、やがて世界の未来を劇的に変える運命を担ったマイクロコンピュータの誕生である。

子供のころ読みふけた手塚治虫『鉄腕アトム』 その冒頭には手のひらに載るコンピュータのカットがあった。「1974年に原子力による超小型電子計算機が発明されて」と1952年に手塚が描いた空想である。20年先を3年の誤差で予測した。原子力という言葉を除かなければならないし、性能もまったく異なるが、予言が現実化した。

やがて嶋正利氏の名前が伝わってきた。その4ビットコンピュータは、なんと日本人が設計したのだ。ピジコンという電卓会社の技術者で、東北大で化学を学んだのに天才を発揮した人。

嶋氏は国内で引っ張りだこになり、あちこちで講演されたようだ。京大でも講演されたことがある。若い方だった。「私は手が不自由だったので、希望の会社に就職できず、教授のお世話で電卓会社に就職できた」。

その本『マイクロコンピュータの誕生 わが青春の4004』。嶋氏が岩波書店で上梓されたのは1987年のことだから、私の記憶と齟齬を

来すほど後のことである。この書の中で、マイクロコンピュータは「知的革命」として熱く語られている。

嶋氏は、初期のマイクロコンピュータの過半を自ら誕生させた父である。彼の手になる4004、8080、Z80は、スミソニアン博物館に歴史的電子部品として現在も展示されている。京都賞など数々の栄誉も受けた。

一世を風靡したスペースインベーダーのゲーム機は8080を使っていた。またパソコンが普及し始めた頃、その中身はZ80だった。チップのことなどまったく知らなくても、誰もがその恩恵に浴していたのである。

嶋氏の本は、技術者の書いた書としては異色に見える。専門技術の記述が詳しいのはもちろんだが、料理の名もよく登場する。人物の写真はたいい食事中でほほえましい。

青春記である。初任給2万9800円の日本。背広の価格もそれと同程度だった。英語もまともにしゃべれないのに、新興インテル社と電卓用チップの開発交渉に。やがて判明した驚くべき事実 当時の小さなインテルには設計できる技術者がまだいなかったのだ。だから依頼側が設計することに……。

当初は慣れなかったステーキのランチがやがて楽しみになる。日本国内では中古のスバル360だったが、アメリカでは大型車に。モータリゼーションとステーキの文明国アメリカを若者が掌中にしていく過程が、若々しい筆致で読者に伝わってくる。

彼我の格差があまりにも大きく、インテルは住居も自動車も提供する。借金を先方に申し込

まないと渡米もできない状況だったが、嶋氏の楽天さがむしろ頼もしい。天才技術者は急速に育っていく。いま読み返してもわくわくする。

最初のマイコン 4004 を完成後、日本へ戻った嶋氏。しかし、インテルの社長は日本側の技術役員と電話で掛け合い、再び引き抜いていく。日本の役員は怒ったが、マイコンと半導体の将来を考えて許してくれた。

嶋氏は述懐する 「あとから振り返ると、今まで7、8回の転機なり試練があったが、すべてより良い方へと進むことができた。いずれの場合もあまり深刻に考えずにチャレンジしたことが成功への道であったのかもしれない」と。

この本からは、日本とアメリカの働き方の大きな違いが伝わってくる。何よりもアメリカでは、能力さえあれば信頼して大きな仕事を任せしてくれる。歳の順などにはこだわらない。優秀な若者がどんどん育つ。

もう少し英語が上手になってからと思っていたのに、「お前の英語は昔よりいくらか良くなった」と一言で、一瀉千里に仕事へと引きずり込まれる。戸惑い、もまれつつ、こんな猛烈とは思ってもいなかったと、それでもアメリカ流の仕事のやり方を自らの大きな財産にしていく嶋氏の不屈の気性。

IT(情報技術)でわが国がようやく世界に伍し始めた1970年代の物語である。日本国内でも大型コンピューター、半導体技術、日本語ワープロ技術など、輝かしい成果を上げていた時期。その時代を海外で駆け抜けた貴重な実体験記である。

一仕事さえ成し遂げれば、休暇に入ってしまうアメリカの自由さ。斜め向かいに住むのは、競争相手モトローラ製のマイコンを設計した技術者。煮えたぎる青春の情熱を読み継ぎたい一書である。

(いながき こうさく)



嶋正利氏近影と著書『マイクロコンピュータの誕生 わが青春の4004』

書名 : マイクロコンピュータの誕生 : わが青春の4004
著者 : 嶋 正利
ISBN : 400006021X
出版者 : 岩波書店
出版年 : 1987

この図書は現在絶版ですが、つぎの学内図書館・室に所蔵があります。
 (附属図書館、人環・総人図書館、工学部吉田建築系図書室)

KURENAIコンテンツ紹介

「泌尿器科紀要」のリポジトリでの公開開始にあたって

医学研究科助教 兼松 明弘
医学研究科教授 小川 修

「泌尿器科紀要」(以下「紀要」)は京都大学医学研究科の泌尿器科学教室を中心に刊行している和文学術誌です。泌尿器科学は腎臓、膀胱などの尿路系と、精巣、前立腺などの男性性器系を扱う医学の一分野です。外科系に分類されますが腎臓以外の臓器では内科学としての側面もっており、現在では腫瘍学、生殖医学、移植透析医学、発生発達医学、内分泌学、排尿機能学など多彩な学術分野を包括する大きな研究領域に発展してきております。

「紀要」は1955年(昭和30年)に、当時の京大泌尿器科教授である稲田務を編集長として発刊され、以後加藤篤二、吉田修(現:名誉編集長)から現在の小川修編集長へと受け継がれています。この間、数多くの原著論文と症例報告の発表の場となり、日本の泌尿器科学の進歩の一翼を担ってきました。発刊当初は原著論文の比率が高かったようですが、日本の泌尿器科学の進歩に伴い原著論文が国際誌に英文で出版されることが増えるなかで、近年は臨床症例報告を日本語で発表する場としての重要性を増しています。医学部を卒業して最初に書いた論文が「紀要」の症例報告であった泌尿器科医は数多いと思います。当誌では年間の最優秀原著論文を「稲田賞」として1983年より表彰していますが、このような流れをうけて2008年からは稲田賞に症例報告部門を設けて泌尿器科医の目標としていただいています。

当誌の編集業務は教室関係者数名と非営利団体である泌尿器科紀要刊行会というごく小規模なグループによって運営されております

ので、時代の趨勢であるオンライン化を実現することはつい最近まで難しいかと思われていました。そのため、このたび附属図書館関係者の御尽力によりリポジトリでの公開が始まり、論文内容のウェブでの閲覧が可能となったことは関係者にとって大きな朗報でした。

今回の「紀要」のリポジトリでの公開は、日本中の泌尿器科医にとって臨床上の疑問点や難しい症例に遭遇した折に当誌の豊かな和文情報の蓄積へのアクセスを容易にしました。必要とされる情報を日本語で迅速に得られることにより、「紀要」の存在感と有用性が日本の泌尿器科の臨床活動の中で高まることは確実であり、大きな意義をもつと思います。

このたび京都大学泌尿器科の学術活動のひとつの結実である「紀要」をこのような形で世にひろめていただいき、リポジトリが学術情報の発信源としての京都大学の地位を益々高めていかれることを期待しております。

(かねまつ あきひろ)

(おがわ おさむ)



泌尿器科紀要(泌尿器科刊行会)

<http://www.acta-urologica-jpn.jp/>

紀要を電子化してKURENAIで公開しませんか？

図書館機構ではリポジトリ(KURENAI)事業を通じて、学術雑誌掲載論文、学位論文、紀要論文など日々創造される京都大学の研究・教育成果を蓄積し、Web上で誰もが無料で読めるように公開しています。「泌尿器科紀要」のように、個々の論文だけでなく、学内の研究科・研究所・センター・研究室で発行されている紀要・雑誌・年報や本学研究者が中心となった学会・研究会のジャーナルやプロシーディングスなど雑誌全体の電子ジャーナル化もサポートしています。本事業に関心のある方は附属図書館情報管理課電子情報掛(内線2618)までお問い合わせください。

(附属図書館情報管理課電子情報掛)



京都大学発行電子ジャーナル

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/index.html>



泌尿器科紀要(KURENAI)

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bulletin/urologica>



泌尿器科紀要 掲載論文情報ページ



泌尿器科紀要 掲載論文 PDF

生態学研究センター図書室紹介 生態学の歴史とともに

図書室概要

生態学研究センターは1914年に創立された京都帝国大学医科大学附属大津臨湖実験所と、1964年に設置された京都大学理学部附属植物生態研究施設の2施設を母体として1991年に設立され、1998年に現在の大津市瀬田に移転しました。

生態学研究センター図書室はセンター研究棟の一室に設けられた、閲覧室、カウンター、書庫がすべてひとつのスペースにまとまっている200㎡ほどの空間になります。

遡及入力も完了し、約1万4千冊の蔵書(図書)はすべてオンラインで検索可能です。

多数の英文図書を含んだ生態学関連の蔵書構成に対応するため、分類方法はDDC21(Dewey Decimal Classification)を採用しているのも当図書室の特徴です。

利用について

生態学研究センターは理学研究科・生物学専攻の協力講座であり、主な利用者は大学院生以上の学生および教員、研究員です。また全国共同利用研究施設として施設利用の利用登録者や、生態学研究センターが外部研究者に委嘱している協力研究員にも利用いただけるようになっております。

平成17年7月の学内デリバリーサービスの開始により、学内の他図書館・室へ図書を配達できるようになり、本学キャンパスを始めとした利用者の方には当室の蔵書がより便利により多く活用されるようになりました。

学内利用者だけでなく、国内稀少文献も多

いため他大学・機関より図書の貸借や文献複写の依頼があります。

蔵書の特徴

生態学および生態学に関連する分野の図書を中心に幅広く収集しています。母体である大津臨湖実験所と植物生態研究施設の蔵書を引き継いでいるため、淡水生物学、陸水学、植物生態学関係の貴重な図書や雑誌を多数所蔵しています。

コレクションとしては、進化論・自然科学史関係の「徳田文庫」があります。センター教授であった井上民二氏や安部琢哉氏の蔵書の寄贈を受け、それぞれ「井上文庫」「安部文庫」として利用されています。また東京大学教授であった門司正三氏の蔵書の寄贈を受け、植物生態学関係を中心に広い分野の「門司文庫」もあります。



「種の起原」ダーウィン著；大杉榮譯，新潮社，1916

「生物始源：一名種源論」チャーレス・ダーウィン著；立花銑三郎譯，経済雑誌社，1896 いずれも徳田文庫



「Synopsis des Diatomées de Belgique」Henri van Heurck, 1880-1885
 上段左 Atlas 上段右 Text
 下段 Table alphabétique

雑誌ではバックナンバーのオンライン化がなされていないJournal of limnology (1942 - , Memorie dell'Istituto italiano di idrobiologia Dott. Marco de Marchi. より誌名変更) や Verhandlungen der Internationalen Vereinigung für Theoretische und Angewandte Limnologie (1923 -)も初号より現在まですべて揃っています。Fundamental and applied limnology (1906 - , Archiv für Hydrobiologie : Organ der Internationalen Vereinigung für Theoretische und Angewandte Limnologie より誌名変更) もほぼ全巻揃っており、学内外に多く利用されています。



閲覧室

これからの図書室

生態学の拠点としての生態学研究センターの教育・研究活動を支える蔵書構築をめざし、昨年度より蔵書購入の選書方針を見直しました。より多くの利用者の方に活用していただくためには、オンラインサービスへの対応が必要であり、そのためには全蔵書へのバーコード貼付が今後の課題となっております。

生態学研究センターの蔵書には大津臨湖実験所創設者の石川日出鶴丸氏や川村多実二氏、国内や海外の著名な生態学者のサインが入った図書が数多くあります。日本の生態学の歴史とともに歩んできた生態学研究センターの歴史がそのまま蔵書として形作られているからです。生態学研究センター図書室は、文献や文献情報を伝えるだけでなく、そういった生態学の歴史を伝える役割も果たしていると思います。

図書室として文献やさまざまな学術情報を提供するサービス窓口であるのはもちろん、生態学の歴史と未来をつなぐ場としてのあり方も大切にしていきたいと考えています。

(生態学研究センター図書室)



生態学研究センター図書室

<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/ecology/library/index.html>

「キャンパス間返送サービス」を開始しました

「遠くのキャンパスの図書室で本を借りたのはいいけれど、なかなか返しに行くことができなくて、困った・・・。」「たまたま遠くの図書室の書架でよい本を見つけて、すぐ借りたいと思ったけれど、もう滅多に来ることがなく、返却ができないのであきらめた・・・。」

今までこのようなことは、ありませんでしたか？

こんな時の、図書の借出・返却が便利になる「キャンパス間返送サービス」を開始しました。

<サービスの概要>

別キャンパスの図書室で借りた図書を、お近くの図書室で返却できます。

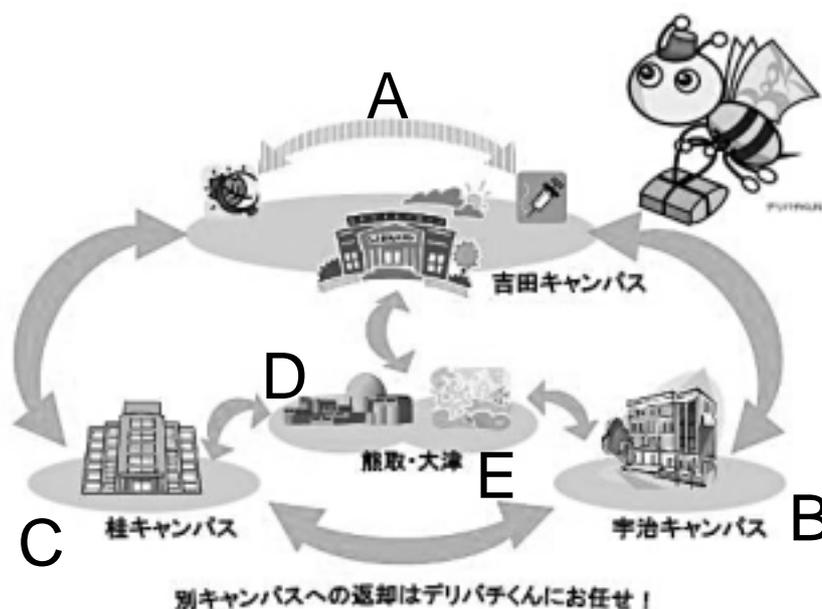
(例：附属図書館で借りた図書を、桂キャンパスの図書室で返す。)

「遠くのキャンパスで借りた図書を返すために、わざわざまた遠くまで行かなくてもよい」ということが目的のサービスです。借りた図書を、同一キャンパス内の他の図書室で返すことはできません。

(例：附属図書館で借りた図書を、経済学部図書室で返す。 ×)

ただし吉田キャンパスの北部構内と南部構内は離れていますので、南北構内間の返却は可能とします。

(例：理学部図書室で借りた図書を、薬学部図書室で返す。)



< 注意点 >

京大の全ての図書室で、このサービスが利用できるわけではありません。「借りた先」「返す先」の図書室が、このサービスに参加していることが条件です。利用可能な図書室については、下記の表をご覧ください。

返却できる資料とできない資料があります。借出時に図書室で確認してください。

「学内デリバリー・サービス」で他の図書室から取り寄せた図書は、借り出した図書室の窓口へ返却してください。片道返送サービスはご利用になれません。

ブックポストに入れず、図書室の窓口へ持参してください。

A 吉田キャンパス	附属図書館 文学研究科図書館 教育学部図書室 経済学部図書室 工・化学系図書室(吉田) 工・電気系図書室(吉田) 工・建築系図書室(吉田) 工・地球系図書室(吉田) 工・物理系図書室(吉田) 人文科学研究所図書室 経済研究所図書室 エネルギー科学研究科図書室 情報学研究科図書室 地球環境学堂図書室 アジア・アフリカ地域研究科アジア専攻図書室 人環・総人図書館	B 宇治キャンパス	附属図書館宇治分館
	(a1) 北部構内	C 桂キャンパス	工・化学系図書室(桂) 工・電気系図書室(桂) 工・建築系図書室(桂) 工・地球系図書室(桂)
	(a2) 南部構内	D 熊取キャンパス	原子炉実験所図書室
		E 大津キャンパス	生態学研究センター図書室
<p>「キャンパス間返送サービス」が 利用可能な図書室一覧 (2009年6月30日現在)</p>			

図書館の新しいサービス、ぜひご利用ください。(図書館サービス部会)

中国の図書館事情調査

理工系大学図書館・デジタルライブラリーを中心に

京都大学大学院工学研究科総務課図書掛 野間口 真裕
京都大学附属図書館情報管理課電子情報掛 大西 賢人
京都大学附属図書館情報管理課資料管理掛 渡邊 伸彦
京都大学附属図書館情報管理課図書情報掛 林 豊

1. はじめに

我々は平成20年度国際交流推進機構基盤強化経費に基づく教職員等の海外派遣事業によって、2月19日から27日までの9日間、中国の図書館を訪問した。訪問先は上海交通大学図書館、上海図書館、中国国家図書館、北京大学図書館およびCALIS(中国高等教育文献保障システム)管理中心、清華大学図書館の6ヶ所である。本稿では各機関での調査概要について紹介する。紙幅の関係上、詳細については、京都大学学術情報リポジトリKURENAIで公開されている報告書を参照されたい。

海外派遣事業実施報告書

「中国の図書館事情調査：理工系大学図書館・デジタルライブラリーを中心に」

<http://hdl.handle.net/2433/77706>

2. 上海交通大学図書館

初めに上海交通大学図書館を訪問した。上海



上海交通大学図書館玄関



上海交通大学図書館館内

交通大学は江沢民前国家主席を輩出した大学で理工系の名門として知られている。

5つのキャンパスに4つの図書館があり、新館と呼ばれる理工生医農科総合館、包玉剛图书馆(人文社科综合分馆)、包兆龙图书馆(管理与社科分馆)、医学院图书馆(医学分馆)からなる。

今回、我々が訪れた闵行キャンパスは数年前にできたばかりで市内中心部から少し南に離れた場所にある。広さは東京大学本郷キャンパスの3-4倍はあるという。1つ1つの建物が大きく、入口を探すのも、入口から図書館まで移動するのも大変であった。本学も吉田キャンパスの過密化が進み、桂キャンパスに移転がおこなわれているが、中国でもこのような郊外型キャンパスが増えているのかもしれない。

昨年12月に開館したばかりの新館を上海交

通大学情報科学技術研究所夏佩福副所長に案内していただいた。非常に巨大な建物で、直方体の建物に3つの塔を引っ付けたような構造になっている。3つの塔はそれぞれサブジェクトが異なっており、例えばある塔では工学のサブジェクトの資料が集められ配架されている。すべて開架となっており、雑誌や図書もそのサブジェクトであれば同じ場所に配置されていた。各フロアにはそれぞれレファレンスカウンターがあり、質問があれば気軽に尋ねることができる。すべての塔をつなぐ直方体の建物はインフォメーションコモンズとして様々な机や椅子が置かれ、また、グループ学習室も置かれていた。貸出・ILLについては1Fの集中カウンターでおこなわれていた。図書館にコンビニエンスストアが併設されており、軽食がとれるカフェのような空間がある。新館は近代的でユーザ中心のデザインで従来の中国のイメージと全く異なり大変驚きであった。これは大学の理念「IC²(IC1: Information Commons × IC2: Innovation Community)」を表現しているとのことである。(野間口)

3. 上海図書館

上海図書館は1952年に設立された、中国国家図書館に次いで国内第2位の規模を誇る大型公共図書館である。『維摩詰経』や清朝末期の大臣である盛宣懐関係の資料、家譜(家系図)など約370万点の古典籍を有するほか、外国語資料や自然科学系資料も積極的に収集し、2007年末段階で図書・定期刊行物・科学技術レポート・特許文献などとあわせて約5000万点の資料を所蔵している。これらの所蔵資料や文献情報の提供サービスに加えて、「上图講座」とよばれる市民講座や芸術作品の展示会などを積極的に開催している。また、1995年には情報研究と文献提供サービスをおこなう上海科学技術情報研究所と合併し、政府・研究機関・企業に対して専門的な情報や文献を収集・組織化・分

析するコンサルティング業務など研究支援型のサービスも提供している。さらに、上海では上海図書館が中心となって大学図書館・公共図書館等の館種を越えた地域図書館ネットワークを構築し、一卡通(共通利用証)の発行、デリバリー・ILLサービス、オンライン合同レファレンスサービスなどをおこなっている。

このように上海図書館では広域かつ多様なサービスを展開しているが、最も印象的であったのはIEEE、Cambridge Journals、ACS、ASP、NetLibrary、Springer LINK eBook、CNKI、方正中文電子图书、龙源电子期刊、维普中文科技期刊全文数据库など大規模な電子リソースを契約し、リモートアクセスサービスなどを通じて利用者に提供している点である。我々の応対をしてくださった国際交流処の沈麗云処長にその理由を質問したところ、上海市内には電子リソースがあまり充実していない中小規模の大学も多数存在し、それらの大学に所属する研究者や学生の研究・学習活動をサポートするために意識的に電子リソースの導入をおこなっているとのことであった。公共図書館が地域の学生や研究者のために電子リソースを提供しているという点は興味深いだが、中国では外国語の電子リソースに加えて、中国語の電子リソースも多く生産・流通しており、研究・学習活動における電子リソースの需要が高いことも関係しているのかもしれないと感じた。



上海図書館内にある書店

館内の見学では書店が併設されていたことが印象に残っている。沈処長によれば、出版直後で未整理状態の図書やベストセラーなど人気のあるものは図書館だけでは利用者からの要望に十分にこたえられない場合があり、販売という提供方法ではあるが館内に書店を併設することでそのようなニーズにも応えていくことができる。また中国では海外に比べて図書の値段が安いいため購入する人も多いことも関係しているかもしれないということであった。日本でも川口市の「キュポ・ラ」のように公共図書館と書店とが同じ施設内に入っている例もある。もちろん内容や種別によって棲み分けはある程度必要であると思うが、同じ図書というメディアを扱う書店と図書館がひとつの場所にあるというのは利用者の立場からすれば便利ではないかと感じた。(大西)

4. 中国国家図書館

中国国家図書館(NLC)はその前身である組織から数えると約100年の歴史を持つ図書館である。蔵書は2600万冊をゆうに超え、善本古籍27万点、普通古籍167万点を始めとして、甲骨文字資料や永楽大典など様々な貴重資料を擁する。また、中国国内最大の外国資料収集館でもあり、115種にわたる言語の資料が全蔵書の半数を占めている。施設は主に3館に分かれており、古籍館・旧館・新館と呼ぶ。新館は2008年9月にオープンしたばかりで、全館の建築面積をあわせると約25万平方メートル、世界の国立図書館の中でも第3位の広さを誇る。

我々は二日間、NLCで聞き取り調査と見学をおこなった。初日は新館で対応していただいた。新館は開館以来、1日あたりの入館者が1万人を超える人気の図書館である。閲覧室が約40室あり、閲覧席も3～4000席を数える。インフォメーションコモンズとしても250席を確保している。新館は書庫の狭隘から建設されることになったとはいえ、利用スペースを重視した造りになっており、開放性も高い。4Fから地下2Fまでを見渡せる吹

き抜けが館の中心にあり、利用者の様子から書架まで一望できるのは壮観の一言に尽きる。また、最新技術の導入にも積極的であり、壁面に投影する資料画像をモーションセンサーで操作するという変わった閲覧エリアがあったり、電子版の新聞や貴重所画像を見ることができる大型タッチパネルがあるなど、様々な閲覧方法を提供する。新館の開架に配架された資料にはRFIDタグが添付されている。RFIDは蔵書点検など幾つかの用途に使用しているようだが、その中でも特殊なサービスとして“OPAC検索結果に、館内のどの書架のどの棚に配架されているかを画像で表示する”というものがあった。その他にも持ち運び可能な電子ブックリーダーを貸し出したり、携帯電話にインストールしてNLCのデジタルライブラリ機能を利用できるソフトを提供したりと、特に電子情報を提供するサービスが活発であるという印象を受けた。



中国国家図書館新館、6層を見渡す吹き抜け

初日の午後と二日目に、我々は旧館も見学させていただいた。旧館は文字通り古色蒼然、歴史を感じさせる佇まいである。NLCの蔵書の大部分が旧館に収容されており、その多くが保存用(=利用することができない)となっている。中国の納本制度では、NLCへ最低3冊を収めることになっており、そのうち2冊がここで保存用として遣される(残り1冊は閲覧用)。旧館にも開架書架は一部あるが、殆どが閉架書架であり出納カウンターでの閲覧となる。まさに古式ゆかしい図書館の姿を垣間見る。博士論文もこ

ここに所蔵され、完全閉架ではあるものの全て利用可能である。中国では博士論文も納本の対象であり、網羅的に収集される。現在は、電子版の博士論文についても収集できるように体制を構築中とのことであった。

NLCは巨大な施設を通して物理的に提供するサービスもさることながら、ホームページなどWeb上で提供するサービスも多くおこなっていた。NLCの情報をいつでも検索できるように、Webブラウザ(Internet ExplorerやFirefox)のアドオンとしてツールバーを提供するなどのものである。このようなツールを外部の専門家の力を借りずに開発可能なのは、ひとえにスタッフの層の厚さに他ならない。NLCではサブジェクトライブラリアンなど学科の専門職員こそないものの、様々な専門性を発揮できる職員を多く採用している。システム系は勿論のこと、工業デザインなどの分野まで、多様な職員を集めていることもNLCの大きな特色のひとつである。

NLCで収集される資料は単に国内の出版物だけではない。最初に述べた通り、様々な言語の外国語出版物も収集し、電子リソースにも積極的である。日本の大学で契約しているような電子ブックや電子ジャーナルの導入もおこなっている。電子リソースの提供も様々な方法でおこなっており、ユーザからの反応も芳しいようである。また、電子リソースの長期的な保存についても方針を確立しており、そのために契約段階から交渉をおこない、ミラーリングの為のデータを受け取ることもしている。単に利用者の利便性を高めるためのアクセス保障だけではなく、企業と共同することでデータベースを遺していくことを視野に入れているところなど、とても意義深いと感じた。(渡邊)

5. 北京大学

北京大学は清華大学と並んで中国のトップを争っている大学である。どちらも総合大学であるが、北京大学は文系、清華大学は理系が強いようだ。両大学は中国のシリコンバレーと呼ばれる中関村

に位置しているが、大通りを1本だけ挟んで隣接しているというのが面白い。

北京大学図書館訪問に当たっては北京大学信息管理系の李常慶副教授にコーディネイトを依頼した。彼は東京大学大学院で図書館情報学を学び、筑波大学大学院で博士号を取得するなど日本とのつながりが深い。もちろん日本語も堪能である。ミーティングは2時間程度であったが、彼の通訳のおかげで副館長の肖琮氏とCALIS管理中心(図書館5階にある)の姚晓霞氏とのディスカッションを遠慮なく楽しむことができた。



北京大学図書館でのミーティング

ここでは彼女たち管理職の知識の広さ・深さが印象に残っている。各訪問先には事前に100項目からなる質問状を送付したのだが、その扱いはさまざまだった。肖氏と姚氏は事前準備はそこそこにしてその場で質問を読んで回答しているように見受けられたが、そのレスポンスの早さに驚いた。そのうえ「後日メールで回答する」と言われた質問は1つしかなかったと記憶している。我々のテーマは図書館経営、サービス、目録、OPAC、電子ブック、ERMS、オープンアクセス、機関リポジトリ、電子図書館、海外製図書館システムと多岐に渡り、質問のレベルも戦略に関するものから実務的で細かなものまで様々である。正直なところ私は同行した他の3人が考えた質問の背景にある問題意識やそこに登場する用語をしっかりと理解できているとは言えない。そのような難問に次々と即答していく彼女たちのレベルは非常に高く、今後目標に

する価値がある姿だと感じた。(林)

6. 清華大学

最後の訪問先は清華大学図書館である。14時からのミーティングの前に通訳の董広芳さんと昼食に出かけた。彼女は北京大学で日本語を勉強している修士1年生で、指導教官経由で通訳をお願いすることになった。観光旅行の通訳なら経験があるがこういった本格的な通訳は初めてだそう。また、大学図書館に対してはひとりのユーザにすぎず特段専門用語に明るいわけではない。お互いに緊張をほぐすためにもこの時間があって良かったと感じる。

敷地の北半分が古風な庭園になっている北京大学とは対照的に、清華大学のキャンパスはアメリカ風の広々とした雰囲気だった。また、北京大学図書館はどっしりとした城のような建物で写真撮影の有名スポットにもなっているのに対して、清華大学図書館はスペースに余裕があるのか水平に広く延びており、それほど存在感を主張しているわけでもないためここで写真を撮る観光客は少ないだろうと感じた。董さんに両大学の違いを尋ねたところ「清華大学はお金持ち」などとライバル心を見せてくれたのが面白かった。



清華大学図書館でのミーティング

清華大学は他訪問先とは違って適当なコネクションがなかったため、図書館 Web サイトに掲載されていたアドレスに直接メールで依頼した。早く返信していただいたホストの向阳氏には非常に感謝している。ミーティングでは、まず副館長の

姜愛蓉氏からプレゼンがおこなわれ、それから質問状をベースとしたディスカッションに入った。常時 10 名程度のにぎやかな雰囲気の中で英語、日本語、中国語、笑い声が入り混じった質疑応答を楽しんだ。

ハイライトはなんといってもサブジェクトライブラリアンの范愛紅氏の話だろう。とても楽しそうな顔で自分の仕事 選書やレファレンス (CALIS 開発のヴァーチャルレファレンスシステムを使っている。「このシステムはすごい」と言っていた) など について話してくれたのが印象強く残っている。図書館 Web サイトの「学科サービス」というコンテンツにはサブジェクトライブラリアンのダイレクター (名前、専門、メールアドレス) が公開されている。そこから「学科网页」というページにリンクしてあるが、このページをベースにサブジェクトライブラリアンは Web 上の活動をおこなっているようだ。私はこのサブジェクトライブラリアン制度そのものではなく、自分の強みを持ち、それを組織に認められて相当する権限を与えられ、生き生きと仕事をし、その様子をこうやって他人に語れるという点がひどく羨ましかった。それに比べて自分はどうかだろうか? (林)

7. おわりに

本研修では、本学大学院教育学研究科川崎良孝教授、筑波大学大学院図書館情報メディア研究科呑海沙織助教、国立国会図書館前田直俊様、本学大学院工学研究科都市環境工学専攻水野忠雄助教、附属図書館総務課中村節子専門員のほか多くの方々にご協力いただいた。この場を借りて、心より御礼申し上げたい。

(のまぐち まさひろ)

(おおにし まさと)

(わたなべ のぶひこ)

(はやし ゆたか)

教員著作寄贈図書一覧

(平成20年6月～平成21年5月)

身分・所属	寄贈者氏名	書名	出版社	出版年
人文科学研究所	籠谷 直人	神戸華僑華人研究会創立20周年記念誌 (1987-2007)	神戸華僑華人研究会	2008
名誉教授	糸川 嘉則	看護・介護・福祉の百科事典	朝倉書店	2008
文学研究科	苧阪 直行	意識の脳内表現	培風館	2008
名誉教授	荒牧 典俊	ブツダのこぼから浄土真宗へ(光華選書5)	自照社出版	2008
エネルギー科学研究科	東野 達	大気と微粒子の話(学術選書 033)	京都大学学術出版会	2008
名誉教授	上横手雅敬	鎌倉時代の権力と制度	思文閣出版	2008
教育学研究科	川崎 良孝	場としての図書館:歴史、コミュニティ、文化	京都大学図書館情報学研究会	2008
情報学研究科	船越 満明	カオス(シリーズ非線形科学入門3)	朝倉書店	2008
文学研究科	夫馬 進	연행사와통신사 燕行使・通信史	신서원(新書苑)	2008
防災研究所	河田 恵昭	これからの防災・減災がわかる本 (岩波ジュニア新書603)	岩波書店	2008
経済学研究科	諸富 徹	財政再建と税制改革(財政研究第4巻)	有斐閣	2008
名誉教授	興膳 宏	新版中国の文学理論 (中国文学理論研究集成1)	清文堂出版	2008
高等教育研究開発推進センター	溝上 慎一	自己形成の心理学	世界思想社	2008
人間・環境学研究科	河崎 靖	ドイツ方言学:ことばの日常に迫る	現代書館	2008
名誉教授	今里 哲久	竹箴作り覚書:竹箴製作の手引き	日本竹箴技術保存研究会	2008
法学研究科	毛利 透	表現の自由:その公共性ともろさについて	岩波書店	2008
経済学研究科	田中 秀夫	思想学の現在と未来 (現代世界:その思想と歴史1)	未来社	2009
地域研究統合情報センター	Wil de Jong	Manejo forestal comunitario en América Latina	CIFOR	2008
名誉教授	人見 勝人	入門編生産システム工学:総合生産学 への途 第4版	共立出版	2009
人間・環境学研究科	岡田 敬司	人間形成にとって共同体とは何か:自立 を育む他律の条件	ミネルヴァ書房	2009
原子炉実験所	今中 哲二	広島および長崎における原子爆弾放射線被曝線 量の再評価:線量評価システム2002 上巻、下巻	放射線影響研究所	2006
地域研究統合情報センター	山本 博之	「民族の政治」は終わったのか? (JAMS discussion paper 1)	日本マレーシア研究会	2008

身分・所属	寄贈者氏名	書名	出版社	出版年
人間・環境学研究科	高橋 由典	社会学者、聖書を読む	教文館	2009
人間・環境学研究科	水野 尚之	ヘンリー・ジェイムズ自伝:ある青年の覚え書・道半ば 第二巻、第三巻	大阪教育図書	2009
工学研究科	王 福林	Ensure energy efficiency of HVAC systems	上海科学普及出版社	2006
名誉教授	服部 春彦	経済史上のフランス革命ナポレオン時代	多賀出版	2009
元経済学研究科教授 元上海センター長	山本 裕美	The political economy of Sino-American relations : a greater China perspective	Hong Kong University Press	1997
元経済学研究科教授 元上海センター長	山本 裕美	China's economic development structural change East Asia	Shanghai Center for Economic Research, Graduate School of Economics Kyoto University	2003
教育学研究科	鈴木 晶子	「京都大学らしさの根源を探る」調査研究報告書:平成20年度総長裁量経費研究プロジェクト 個別研究報告書3		2009
人文科学研究所	富永 茂樹	転回点を求めて:一九六〇年代の研究	世界思想社	2009
文学研究科	中務 哲郎	Humaniora Kiotoensia : on the centenary of Kyoto humanities	Graduate School of Letters	2006
人間・環境学研究科	東郷 雄二	新版 文科系必修研究生活術 (ちくま学芸文庫ト-11-1)	筑摩書房	2009
名誉教授	上横手雅敬	権力と仏教の中世史	法藏館	2009
人間・環境学研究科	廣野由美子	ミステリーの間人学 (岩波新書1187)	岩波文庫	2009
文学研究科	服部 良久	アルプスの農民紛争	京都大学学術出版会	2009

この一覧は寄贈者著作のみの掲載となっております。上記以外にも多くの図書を附属図書館や部局図書室にいただきました。今後とも蔵書充実のためご寄贈いただきたくよろしく願いいたします。

よくある質問と回答(FAQ)

第6回

Q 1 . 学習室24について、土・日・祝日の朝と夜でも利用できるよう、開室時間延長を検討して欲しい。

A 1 . 学習室24の開室時間延長については、オープン以後の利用動向をもう少し観察したうえで結論を出す必要があると考えます。また、開室時間延長にあたっては別途、経費確保が必要となります。

これら条件の検討も含め、今後の検討課題とさせていただきます。

Q 2 . 学習室24の利用について、荷物だけ置いて人のいない席が多いので、何とかして欲しい。

A 2 . 今後は掲示等を行う等工夫して、利用者マナーの向上に努めてまいります。

平成20年度蔵書統計

(平成21年3月31日現在)

部局	新規受入冊数			蔵書冊数			入力冊数累計		
	和書	洋書	計	和書	洋書	計	和図書	洋図書	計
附属図書館	11,858	4,197	16,055	603,724	263,909	867,633	434,680	136,901	571,581
附属図書館宇治分館	625	845	1,470	11,919	54,432	66,351	9,875	38,308	48,183
文学研究科・文学部	14,115	7,115	21,230	611,155	392,591	1,003,746	376,531	367,207	743,738
教育学研究科・教育学部	3,334	1,027	4,361	89,404	64,765	154,169	84,751	61,865	146,616
法学研究科・法学部	4,602	4,539	9,141	289,848	377,014	666,862	186,560	187,155	373,715
経済学研究科・経済学部	3,747	1,319	5,066	271,884	250,599	522,483	238,149	247,523	485,672
理学研究科・理学部	1,516	2,411	3,927	46,815	187,398	234,213	33,786	119,011	152,797
医学研究科・医学部	2,643	1,105	3,748	87,601	153,953	241,554	80,765	132,772	213,537
薬学研究科・薬学部	170	31	201	11,421	27,722	39,143	10,798	27,672	38,470
工学研究科・工学部	1,901	1,539	3,440	141,465	220,491	361,956	101,943	109,318	211,261
農学研究科・農学部	1,645	1,154	2,799	141,433	125,405	266,838	59,669	54,363	114,032
人間・環境学研究科・総合人間学部	7,514	3,506	11,020	314,479	273,220	587,699	225,992	171,667	397,659
エネルギー科学研究科	65	54	119	4,563	5,334	9,897	4,044	4,311	8,355
アジア・アフリカ地域研究研究科	545	3,523	4,068	12,539	78,436	90,975	12,498	77,500	89,998
情報学研究科	490	347	837	12,651	39,793	52,444	15,433	46,352	61,785
生命科学研究科	0	0	0	54	60	114	30	55	85
地球環境学学舎・学舎	411	234	645	1,222	1,021	2,243	1,222	1,021	2,243
公共政策連携研究部・公共政策教育部	125	29	154	651	128	779	704	128	832
経営管理連携研究部・経営管理教育部	245	45	290	893	136	1,029	1,179	149	1,328
人文科学研究所	4,438	947	5,385	483,661	84,858	568,519	190,374	74,101	264,475
再生医科学研究所	0	500	500	833	5,182	6,015	87	638	725
基礎物理学研究所	272	1,274	1,546	9,079	83,588	92,667	6,522	60,154	66,676
ウイルス研究所	0	18	18	308	7,026	7,334	300	2,857	3,157
経済研究所	277	582	859	41,324	37,338	78,662	29,280	31,076	60,356
数理解析研究所	114	3,385	3,499	7,039	80,187	87,226	7,177	77,654	84,831
原子炉実験所	326	325	651	14,579	35,987	50,566	12,637	27,497	40,134
霊長類研究所	88	483	571	7,318	16,956	24,274	5,413	6,719	12,132
東南アジア研究所	491	3,811	4,302	26,959	138,998	165,957	23,442	98,571	122,013
学術情報メディアセンター	14	12	26	5,912	12,715	18,627	3,922	7,584	11,506
放射線生物研究センター	7	51	58	497	2,054	2,551	253	427	680
生態学研究センター	48	199	247	8,548	6,002	14,550	8,578	6,119	14,697
地域研究統合情報センター	6	215	221	7	40,591	40,598	3,426	17,136	20,562
放射性同位元素総合センター	24	3	27	130	60	190	124	49	173
環境保全センター	1	36	37	617	1,372	1,989	253	1,348	1,601
国際交流センター	0	0	0	5	0	5	0	0	0
高等教育研究開発推進センター	42	17	59	2,519	1,004	3,523	2,468	879	3,347
産官学連携センター	110	17	127	605	46	651	602	46	648
福井謙一記念研究センター	1	0	1	58	7	65	58	7	65
フィールド科学教育研究センター	47	38	85	13,813	8,506	22,319	5,481	4,761	10,242
こころの未来研究センター	3	3	6	86	160	246	11	19	30
野生動物研究センター	0	0	0	41	0	41	0	0	0
保健管理センター	0	0	0	7	15	22	0	0	0
大学文書館	0	0	0	696	0	696	696	0	696
計	61,860	44,936	106,796	3,278,362	3,079,059	6,357,421	2,179,713	2,200,920	4,380,633

(注) 附属図書館宇治分館は、化学研究所・エネルギー理工学研究所・生存圏研究所・防災研究所の蔵書数等を含めた数

附属図書館利用統計（平成20年度）

入館利用状況

1. 年間入館者総数

内 訳 673,321人 (前年比22%減)

学内	入館機*	660,997
	マニュアル**	3,966
学外	閲覧***	7,493
	見学	865 (人)

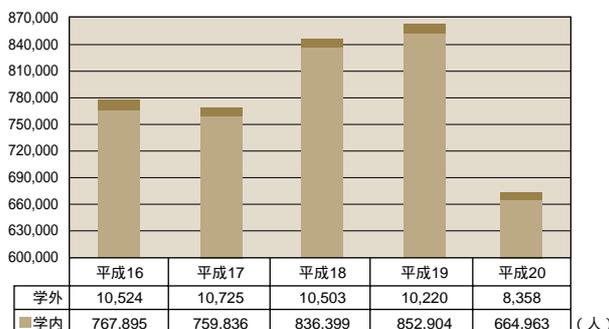
* 卒業生を含む
 ** 忘れたり、紛失等による利用証不携帯の入館者
 *** 学外者の特別閲覧願手続きによる入館者

入館機による入館者 660,997人

開館日	1日当たり	2,182	前年比12.7%減
平日	1日当たり	2,723	前年比14.6%減
土・日曜日	1日当たり	1,013	前年比3.7%減
1日の最多入館者数*		5,857	(人)

*平成20年7月22日

2. 入館者総数5年間推移



資料利用状況

1. 普通図書貸出利用状況

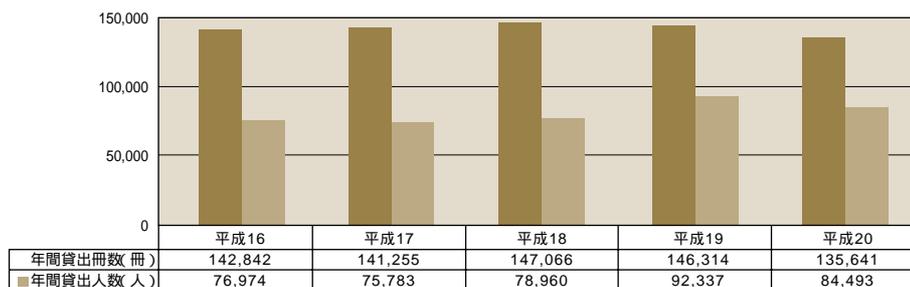
年間利用冊数 138,089冊 (前年比8.5%減)

年間利用人数 85,671人 (前年比8.6%減)

2. 学内者への貸出

	平成19年度	平成20年度	前年比
年間貸出冊数	146,314冊	135,641冊	7.3%減
年間貸出人数	92,337人	84,493人	8.5%減
1日平均貸出冊数	432冊	447冊	15冊増
1人当たり貸出冊数	1.6冊	1.6冊	
年間貸出冊数最高日	4月10日(1,214冊)	7月1日(1,040冊)	

3. 貸出状況5年間推移



利用対象者数

1. 登録者総数

37,607人 (平成20年5月1日現在)

内 訳

教員	3,874
院生	9,925
学生	13,482
職員	3,568
その他	6,758 (人)

教員には非常勤講師、共同研究者等を含む。
 院生には大学院聴講生、研修員等を含む。
 学生には学部聴講生等を含む。
 職員には非常勤職員を含む。
 その他には卒業生その他を含む。

4. 貴重書利用状況

貴重書(特殊文庫)閲覧上位リスト

1	和貴重書	281
2	富士川文庫	128
3	河合文庫	125
4	谷村文庫	60
5	菊亭文庫	52 (点)

参考業務

文献調査<国内>

1. 受付件数

		平成19年度(件)	平成20年度(件)
内容	所蔵調査	5,134	5,353
	事項調査	722	772
	その他	4,185	3,470
	合計	10,041	9,595
形式	FAX(文書を含む)	991	1,308
	電話	2,416	1,978
	カウンター	6,634	6,309
	合計	10,041	9,595

2. 依頼件数

		平成19年度(件)	平成20年度(件)
内容	所蔵調査	56	31
	事項調査	16	41
	合計	72	72
形式	FAX(文書を含む)	72	72

3. 受付・依頼件数合計における 学内者・学外者別利用件数

	平成19年度(件)	平成20年度(件)
学内者	5,926	5,329
学外者	4,187	4,338
合計	10,113	9,667

(参考)

FAX・文書による受付・依頼の機関別件数 (平成20年度)

機関名	受付件数(件)	依頼件数(件)
学内	59	11
国立大学	234	33
公立大学	42	0
私立大学	498	11
国立共同利用機関	28	0
公共図書館等	29	11
非営利団体	68	3
一般企業	49	0
個人	301	0
国立国会図書館	0	3
合計	1,308	72

文献調査<国外>

受付件数

平成19年度(件)	平成20年度(件)
16	57

相互利用

1. 文献複写

	平成19年度(件)	平成20年度(件)
依頼	5,746	4,920
受付	9,660	6,937
合計	15,406	11,857

平成20年度内訳

	国外	国内	学内	合計
依頼	169	3,863	888	4,920
受付	190	6,356	391	6,937
合計	359	10,219	1,279	11,857 (件)

2. 現物貸借

	平成19年度(件)	平成20年度(件)
依頼	1,425	1,427
受付	2,096	2,719
合計	3,521	4,146

平成20年度内訳

	国外	国内	学内	合計
依頼	90	1,280	57	1,427
受付	45	2,233	441	2,719
合計	135	3,513	491	4,146 (件)

平成19年度は学内ILLは含まれてません

文献複写(国内)5年間推移



学内ILLは含まません

現物貸借5年間推移



学内ILLは含まません

図書館の動き

平成21年

4月 7日 附属図書館新入生オリエンテーション(～17日)	平成20年度海外調査研修報告会
10日 情報探索入門(～7月3日)	6月 1日 京都大学図書館協議会第一特別委員会 (平成21年度第1回)
16日 図書系連絡会議	3日 京都大学図書館協議会認証システム監 理特別委員会(平成21年度第1回)
22日 留学生オリエンテーション	19日 第56回国立大学図書館協会総会(新潟)
23日 平成21年度国立大学図書館協会近畿地区総会	23日 近畿イニシアティブ運営委員会(神大)
24日 図書館協議会(平成21年度第1回)	24日 NII目録システム講習会(～26日)
5月11日 図書館業務システム研修(目録)	25日 図書系連絡会議
12日 平成21年度図書系職員初任者研修(～13日)	京都大学図書館協議会学術情報リポジリ 特別委員会(平成21年度第1回)
18日 国立大学図書館協会理事会(東大)	京都大学図書館協議会第三特別委員会 (平成21年度第1回)
19日 外国雑誌センター館会議(東大)	
図書館業務システム研修(ILL・閲覧)	
20日 図書館業務システム研修(収書)	
28日 図書系連絡会議	

目次

<特集:図書館への期待1>「学生がのぞむ図書館」とは

- 西村周三 教育・学生・国際(学生)担当理事・副学長に聞く -	1
新しくなった附属図書館を紹介します	4
青春を駆け抜けるとは<一冊の本シリーズ13>	6
KURENAIコンテンツ紹介 「泌尿器科紀要」のリポジトリでの公開開始にあたって	8
生態学研究センター図書室紹介 - 生態学の歴史とともに -	10
「キャンパス間返送サービス」を開始しました	12
中国の図書館事情調査 - 理工系大学図書館・デジタルライブラリーを中心に -	14
教員著作寄贈図書一覧	19
よくある質問と回答(F A Q)	20
平成20年度蔵書統計(平成21年3月31日現在)	21
附属図書館利用統計(平成20年度)	22
図書館の動き	24

編集後記

本年度の静脩は、「図書館への期待」を年間テーマとして採り上げ、特集記事を毎月掲載していきます。今号の西村理事のインタビュー記事を皮切りに、各方面の方々の記事を掲載する予定ですのでどうぞ期待ください。(s)